



## <恵慶百首>物名十干部試注

著者	福田 智子, 今井 明, 黒木 香, 竹田 正幸, 田坂 憲二, 南里 一郎, 西原 一江
雑誌名	文化情報学
巻	2
号	1
ページ	1-18
発行年	2007-03-20
権利	同志社大学文化情報学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000011164">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000011164</a>

## 惠慶百首 物名十干部試注

福田 智子、今井 明、黒木 香、竹田 正幸、  
田坂 憲二、南里 一郎、西原 一江

惠慶法師は、中古三十六歌仙にも数えられている、十世紀を代表する歌僧である。家集「惠慶集」の末尾には、百首歌が収められるが、本稿ではそのうち、十干を詠み込んだ物名歌、十首について注釈を施す。

### 凡例

- 一、**歌番号** 注釈のはじめに、惠慶百首における通し番号を示し、あわせ  
て（ ）（付きで資経本惠慶集における歌番号）『私家集大成』中古 所  
収「惠慶集」の歌番号と一致）を示す。
- 二、**本文** 底本は、冷泉家時雨亭叢書第六十七巻『資経本私家集三』（二〇  
〇三年十二月刊）所収、資経本惠慶集とする。漢字仮名の区別、仮名遣  
い、おどろ字も底本のままとし、濁点も付さない。
- 三、**校異** 『惠慶集校本と研究』（熊本守雄氏、桜楓社、昭和五三年）に収  
められた以下の影印本を用い、語の異なりのほか、表記の違いも示す。

書陵部一五〇・五五八本

略称（書古）

越桐喜代子氏蔵（前田家旧蔵）本 略称（前）

- 四、**語釈** 見出し語は、底文の表記のまま掲げる。ただし、歴史的仮名遣  
いに改めたり、濁点を付したりする必要のある場合には、見出し語の次  
に（ ）（ ）を付けて示す。
- 五、**別出** 歌集の正式名称（『新編国歌大観』の目次に拠る）、巻数、部立、  
歌番号、歌題、詞書、詠者名、歌、左注を、順に列挙する。
- 六、**考察** 考察中での和歌の引用形式は、原則として、「和歌本文」（歌集  
名・部立・歌番号・詠者名・詞書）とする。なお、『万葉集』の番号は、  
旧・新の順で表記する。

### 注釈

八二（二七七）

【本文】

きのえ

是以下在兼輔集

あきはきのえたにかゝれるしらつゆをあやしくたまとおもひける

【校異】 是以下在兼輔集 ナシ(前) しらつゆ しら露(書古)(前)

おもひける 思ける(前)

【語釈】 きのえ 木の兄、甲。十干の最初。 あきはきのえたに(あきはぎのえだに) 「きのえ」を詠み込む。萩は『万葉集』以来、秋の景物。「あきはぎのえだ」の用例も、『万葉集』に見える。 しらつゆ 草や木に置いた露。白く見えるので白露という。 あやしく 不思議なことに。萩に置いた露を玉だと思ひ込んだことを「あやし」という。 たま 玉。美しい石。『万葉集』から白露を玉に見立てる傾向がある。『歌ことは歌枕大辞典』

「白露」の項、渡部泰明氏)。 おもひける 「ける」は気づきの意。玉だと思ってしまったものが、実は露であったと気づいた。

【通釈】

きのえ

秋萩の枝に降りかかっている白露を、おかしなことに玉だと私は思ってしまったよ。

【別出】

『兼輔集』(冷泉家時雨亭文庫資経本) 一四一番

きのえ

秋風 あきはきのえたにかゝれるしらつゆをあやしくたまと我思かな

『秋風集』巻第五秋歌上、二六〇番

(だいしらす)

右衛門督かねすけ

あきはぎの枝にかかれるしらつゆをあやしく玉とおもひけるかな

【考察】

「是以下在兼輔集」とあるように、恵慶百首 八二番以下の歌群は、『兼輔集』(私家集大成では兼輔 に分類される系統の伝本)にも載る。いま、その冒頭に位置する十干物名歌について、主要伝本の歌番号対照表を示す。

初句	恵慶百首		恵慶集		兼輔集		
	題		冷泉家本	書陵部本	前田家旧蔵本	冷泉家本	正保版本
あきはきの	きのえ	277	277	279	273	141	
ふたりねし	きのと	278	278	281	274	142	
はしたかの	ひのえ	279	281	281	275	143	
ゆふされは	ひのと	280	282	282	276	144	
かせさむみ	つちのえ	281	283	283	277	145	
かたわせ	つちのと	282	284	284	278	146	
さくらはな	かえ	283	285	285	279	147	
さをしかの	かのと	284	286	286	280	148	
よと河の	みづのえ	285	287	287	281	149	
ちはやふる	みづのと	286	288	288	282	132*	
							137
							136
							135
							134
							133
							132
							131
							130
							/

/ 題・歌ともに欠落。

\* 歌あり。題欠落。

題あり。歌欠落。

さて、当該歌において、「別出」の本文に異同がある。すなわち、結句が「我思かな」(兼輔集)、「おもひけるかな」(秋風集)になっているのである。特に後者には「我」の語がない。おそらく本来は、『恵慶集』や『兼輔集』のよつに、「わが」「我」が入った本文だったのだらう。「わがおもひける」の用例としては、「かくのみにありける君をきぬにあらば下にも着むとわがお

もひける」(万葉集・巻十二・二九六四・二九七六)がある。ただ、「おもひけるかな」の用例の方が圧倒的に多く、後世、この本文にかえられた可能性はじゅうぶんに考えられる。

なお、「きのえ」を詠み込んだ歌は 惠慶百首 と 好忠百首 順百首 以外には見あたらない。「ふたばにてわがひきつゝおしまつきのえださすはるになりけるかな」(好忠集 好忠百首・四五二)では、「……松の木」「枝さす……」に「きのえ」を隠し、「た」のうらのまつりごとびとももしきのえらびにいりてなれるなるべし」(好忠集 順百首・五六五)では、「……百敷の」「撰び……」に折り込む。「秋萩の」「枝に……」に詠み込む惠慶歌は、好忠の作に発想が近い。

さて、「あきはぎのえだ」は、「秋萩の枝もとををに置く露の消なば消ぬとも色にいでもやも」(万葉集・巻八・一五九五・一五九九・大伴宿禰像見・大伴宿禰像見歌一首)、「秋萩の枝もとををに露霜置き寒くも時はなりにけるかも」(万葉集・巻十・二二七〇・二二七四・詠露)、「秋萩の枝もとををに置く露の消かもしなまし恋ひつつあらずは」(万葉集・巻十・二二五八・二二六二・寄露)などすでに『万葉集』に多く見られる語句である。その後は、「秋はぎの枝もとををになり行くは白露おもくおけばなりけり」(後撰集・秋中・三〇四・よみびとしらず・題しらず)、「あきはぎのにはへるえだにめでたらばいとつつせみに人やおもはん」(古今六帖・第六・三六五六・そせい)や「あきはぎのえだもとををになりゆくはしら露おもくおけばなりけり」(是貞親王家歌合・五九)など、平安初期の作に集中して見出せる。「露」とともに詠まれることが多いが、当該歌のよつに、露を玉に見間違つという視点は少ない。

「露」を「玉」とみる見立ては、言うまでもなく、「はちすばのにこりにしまぬ心もてなにかはつゆを玉とあざむく」(古今集・夏・一六五・僧正へんぜう・はちすのつゆを見てよめる)や「白玉かなにぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを」(伊勢物語・第六段・七・男)などにも見られる、作歌の常套である。そこで、「あきはぎ」「しらつゆ」「たま」を組み合わせた歌を検すると、これまた『万葉集』に、「小牡鹿の朝たつ野辺の秋萩に玉と見るまで置ける白露」(万葉集・巻八・一五九八・一六〇二・大伴宿禰家持秋歌三首)、「玉に抜き消たすたばらむ秋萩のうれわくらばに置ける白露」(万葉集・巻八・一六一八・一六二二・湯原王贈娘子歌一首)が見出せる他、「うつろはんこと」(いろ)だにをしき秋はぎに玉と見るまでおけるしらつゆ」(拾遺抄・秋・二二二・伊勢・斎院御屏風の系に)、「あきののはぎのしらつゆけさみればたまやしけるとおどろかれつつ」(忠岑集・八四)などが列挙できる。中でも、『万葉集』一六一八(一六二二)番歌の「玉に抜き」という表現は、当該歌の「えだにかかれる」「露のイメージと重なる。

「えだにかかれるしらつゆ」の用例は、「あをやぎのえだにかかれるしらつゆをいとめてぬける玉かとぞ見る」(古今六帖・第六・四一五九・つらゆき・やなぎ)、「秋はぎの枝にかかれるしら露のきえ返りても恋ひらるるかな」(定頼集・一七六・うちにて、九日に)など、「くわすかながら見受けられる。特に前者は、柳の例であるけれども、枝に露が一筋に連なった光景が、たとえば、「萩の露玉にぬかむととればけぬよし見む人は枝ながら見よ」(古今集・秋上・二二二・よみ人しらず・題しらず)という萩の枝の露を詠んだ歌に通じよう。すると、当該歌の発想は、「この貴之の歌をもとに」「あおやぎ」を「あきはぎ」に換えたものと見ることもできようか。そして、「あきはぎ

のえだ」という語句の着想を得た根底に、『万葉集』以来の歌語の伝統が存する点に、留意しておきたい。

八三（二七八）

【本文】

きのと

ふたりねしよことにふかくちぎりてきのとかにわれをうちたのむへく

【校異】 よこと よこと(前) われ 我(前)

【語釈】 きのと 木の弟、乙。十干の二番目。 ふたりねしよこと(ふ

たりねしよこと) 共寝をする夜のたびに。「よこと」は、前田家本では、「こ」と「と」が転倒した「よこと」になっており、その本文ならば「夜床」の意であろう。夜床の用例は、早く「たたなづく 柔膚すらを つるぎたち

身に副へ寝ねば ぬばたまの 夜床も荒るらむ……」(万葉集・巻二・一九四・一九四・人麻呂)があり、中古には「たびねするよどこさえつつあけぬらしとかたぞかねのこゑきこゆなり」(金葉集・冬・二六九・大納言経信・旅宿冬夜といへることをよめる)といった例もある。なお、「別出」に挙げた

『兼輔集』二本では、「とこ(床)にて」になっている。 ちぎりてき(ちぎりてき)、「てき」は完了の助動詞の連用形、「て」に過去の助動詞「き」が付いたもの。過去の時点で、動作が終了していることを表す。 われをうちたのむへく(われをうちたのむべく) 相手の女性に、自分(男性)を頼りにするようにと、言ったことをいう。

【通釈】

夜二人で共寝をするたびに、将来の変わらぬ愛情を深く誓ったことだった。

心どかに私を頼みにするようにと。

【別出】

『兼輔集』(冷泉家時雨亭文庫資経本) 一四二番

きのと

ふたりねしよことにふかくちぎりてきのとかにわれをうちたのめとて

『兼輔集』(正保版歌仙家集本) 一三〇番

きのと

ふたりねし床にてふかく契りてきのとかにわれをうちたのめとて

【考察】

かつて、未永い愛情を誓った仲であったことを、その約束が反故になってしまった後に、思い出して詠んだ歌である。

「てき」という表現を使用する場合、「うたたねに恋しきひとを見てしより夢てふ物は憑みそめてき」(古今・恋一・五五三・小野小町)に代表されるように圧倒的に結句のことが多いが、「わびつつも昨日ばかりはすぐしてきけふやわが身のかぎりなるらん」(拾遺集・恋一・六九四・読人知らず)や当該歌のように、第三句末に用いて、上句と下句とを倒置した歌もある。なお、和泉式部歌においては、「昨日をば花のかけにてくらしてき今日こそいにし春はをしけれ」(和泉式部続集・五三四)など、すべて第三句に使用している(『和泉式部集』二五七(二六二)・五三八・八四九)。

「てき」に上接する語は、前掲の小町歌の影響が強く、「そめてき」の形が比較的多く、「おもひそめてき」(千載集・恋一・六四五・藤原長能)、「いはひそめてき」(新古今集・神祇・一八五七)、「うらみそめてき」(続後撰集・恋五・九六八・太上天皇)などのパターンがある。「ちぎりてき」の用例と

しては、「契りてきひとりおくれてしほる袖の涙よいかにするのまつ山」拾玉集・二八〇七、「もみぢせぬゆゑにはかねてちぎりてきあきはくるともよそにぞあるべき」有房集・二二一（などがある）。

恵慶の「きのと」の折り込み方は、二句にまたがっており、前句末の「き」と後句頭の「のどか」に詠み込んでいる点、順の「さよふけてなにかこひしきのどかにてとしへばしるしあらざらめやぞ」好忠集 順百首・五六六（と共通する。一方、好忠は、「ふゆふかくのはなりにけりあふみなるいぶきのとやまゆきふりぬらし」好忠集 好忠百首・四五二）というように、「伊吹の外山」というひとつの句の中に収めている。

結句が「くべく」で終わる歌は、恵慶にも他に、「花みつつくれなば野へにやどりせん夜のまはむしのこゑもきくべく」恵慶集・一九一）があり、また好忠にも、「かきねにはうのはなつゑんあまよにもわがやどまもる人と見るべく」好忠集・一一六）が見える。これらの歌の「へく」は、「きく」「見る」主体が歌の作者であり、可能の意味を表す。一方、当該歌では、「うちたのむ」主体が相手の女性であるため、「べく」の用法もおのずと異なる。別出『兼輔集』二本の本文「うちたのめとて」の意味合いを読み取るべきであろう。

八四（二七九）

【本文】  
ひのえ

はしたかのとかへるやまのしゐのはときはにかれぬなかとたのまん

【校異】 やま 山（前） しゐのは しゐの葉（書古）しひのえ（前）

なか 中（前） たのまん たのまむ（書古）（前）

【語釈】 ひのえ 火の兄、丙。十干の三番目。 はしたか 「はいたか」とも。鷹の一種。鷹の中でも小型で、腹部に黄黒、または赤白のまだらがあつた。小鷹狩に用いた。「はしたか」は雌の呼称。 とかへる 処返る。も

とのかたちになる、特に鷹の毛が抜け替わる意で用いる。『日本国語大辞典』は、『兼輔集』（歌仙家集本）一三二番歌（別出参照）を引用する。他に、「忘るとは恨みざらなむはし鷹のとかへる山の椎はもみぢず」後撰集・雜二・一七二・よみ人しらず）などの用例がある。 しゐの葉（しひの葉） 椎の葉。常緑で落葉しないという属性から、第四句が導かれる。「家にあれば

けに盛る飯を草枕旅にあれば椎の葉に盛る」万葉集・第二・一四二・一四二）が古い例だが、他の用例は、『草根集』など中世の例がほとんどである。ただし、前田家旧蔵本「しひのえ」のかたちでないと、「ひのえ」が詠み込めないが、和歌において他例を見ない。なお、校異では扱っていないが、

関西大学蔵（岩崎美隆文庫）本では、「しひしば」になっている。詳細については考察参照。 かれぬ 椎の葉が「枯れぬ」に「離れぬ」を掛ける。

【通釈】

はしたかの毛が抜け替わる（冬の）山の椎の葉が、常に枯れないように、いつまでも離れることのない仲だと頼みにしよう。

【別出】

兼輔集（冷泉家時雨亭文庫資経本）一四三番  
ひのえ

はしたかのとかへるやまのしゐのはときはにかれぬなかとたのまん

兼輔集（正保版歌仙家集本）一三二番

ひのえ

はしたかのとかへる山のしるのははときはにかれぬ中をたのまん

【考察】

語釈でも述べたごとく、底本の形のままでは「ひのえ」の文字を折り込むことはできない。現存する伝本では前田家旧蔵本の「しひのえ」が唯一この条件を満たす。この形が本来の姿と考えられるが、それが定着しなかったのは、歌語としてあまり馴染みのないこの語句を、あえて物名のために用いたためであろう。和歌における「椎」の詠まれ方は、後代「椎柴」に収斂していくが、惠慶の時代にはまだ、「椎の枝」という語句を撰び取ることが可能であったと思われる。ただし、その後これが定着せず、「椎柴」の語が席卷するに至り、異文が生じたのであろう。その際「しひのえ」から「しひしは」と改めるには、二文字の変更を必要とするから、中間的な形として、万葉以来の「しひのは（しるしは）」という形が生まれたのではないか。語釈で触れたとおり、関西大学蔵（岩崎美隆文庫）本では、この部分「しるしはの」の形であり（熊本守雄氏『惠慶集 校本と研究』）、「椎柴」という語句が、それだけ固定していたことを示すものである。

そもそも「椎柴」は、平安中期から歌語として定着し、椎の木そのもの、椎の木の群生した所、椎の小枝を指す語として広く用いられた。常緑で落葉しないことから「葉替へ」しない木として詠まれる。「はし鷹のとがへる山の椎柴のはがへはずとも君はかへせじ」（拾遺集・雑恋・二二三〇・読み人知らず）は、その早い例であろう。また、『枕草子』にも、「椎の木、常盤木いづれもあるを、それしも、葉がへせぬために言はれたるもをかし」（花の木ならぬもの）と述べられている。

いずれにせよ、「ひのえ」という文字を折り込むということを優先すれば、生じるはずのない異文であるのだが、それだけに、「椎柴」が、椎の小枝という意味でも使われるようになる。「椎の枝」という語句に、かえって歌語として違和感を持たれ、駆逐されていったということであろう。

ちなみに、「ひのえ」を折り込んだ物名歌としては、「あふくもやそらになびきわたるらんてるひのえしもさやけからぬは」（好忠集 好忠百首・四五三・ひのえ）、「こころにもつしとぞ思ふわがこひのえらばぬやなぞよきもあしきも」（好忠集 順百首・五六七・ひのえ）が挙げられる。好忠は、「照る日の」「えしも……」と詠み込み、順は、「……恋の」「選ばぬ……」にこの文字を折り込んだ。惠慶は、両者と違う方法を模索して、「椎の枝」という着想に到ったと思われる。

最後に、「ひ」と「ぬ」の表記の揺れと実際の音について述べる。「ひのえ」を詠み込むには、「しひ」である必要があるが、平安時代中期以降には、八行転呼によって、語頭以外の八行音はワ行音と同一になっており、当時の話者は「しひ」と「しる」とを発音からは書き分けることができない。底本の親本である『惠慶集』の書写年代は不明であるが、八行転呼が一般的になった時期以降の書写であることを示しているといえよう。「ひ」と「ぬ」の揺れを超えた掛詞の例として、「のぼるべきたよりなき身は木のもとにしるをひろひて世をわたるかな」（平家物語 覚一本・巻四・鶴・源三位入道頼政）がある。表記は「しる」であるが、四位（しる）と椎（しひ）をかけている。

八五（二八〇）

【本文】

ひのと

ゆふされはあひ見るへきをはるの日のとくくれぬこそわひしかりけれ

【校異】 見る（書古）（前） はるの日 春のひ（前）

【語釈】 ひのと 火の弟、丁。十丁の四番目。 ゆふされは（ゆふされ

ば）「ゆふされ」は、ラ行四段動詞「夕さる」の已然形。接続助詞「ば」が付いて、順接の確定条件を表す。夕方になると。「さる」は、自ずから巡つてきて、また巡り遠ざかる意。 あひみる 男女が関係を結ぶ。逢う。

はるの日 春の一日。春は、日照時間が長くなり、日の暮れるのが遅くなる。 わひしかりけれ（わびしかりけれ）、「わびし」は、つらくやりきれない心情を表す。「三代集に非常に多くの例が集中して現れ、八代集では『金葉集』以後の勅撰集には一例も見いだせない」（『歌ことば歌枕大辞典』「侘びし」中村文氏）という。

【通釈】 夕方になるとあの人に逢えるはずなのに、春の日が長く、さうさと暮れないのはつらいことだ。

【別出】

『続後拾遺集』巻第七、物名、五〇二番

（ひのと）

中納言兼輔

夕さればあひみるへきを春の日のとくくれぬこそくるしかりけれ

『秋風集』巻第二十雑体歌、一三五九番

（ひのと）

ゆふさればあひみるへき」 「とくくれぬこそくるしかりけれ

『兼輔集』（冷泉家時雨亭文庫資経本）一四四番

ひのと

ゆふされはあひみるへきをはるの日のとくくれぬこそわひしかりけれ

『兼輔集』（正保版歌仙家集本）一三三番

ひのと

夕されはあひみるへきを春の日のとくくれぬこそわひしかりけれ

【考察】

「ひのと」題の歌は、『新編国歌大観』を検しても、恵慶の当該歌の他には、「かずならでもおもおもひのとしふともかひあるべくもあらずなりゆく」（『好忠集 好忠百首・四五四・ひのと』）、「昨日までふゆこもれりしがまふのにわらびのとくもおひにけるかな」（『好忠集 順百首・五六八・ひのと』）が見られるのみである。「ひのと」を物名として読み込む際に、格助詞「の」を用いる点は恵慶の当該歌を含め、三首とも共通するが、さらに恵慶歌と順歌は、ともに「とく」（形容詞）とし「の連用形」の語を「と」にあてている。

なお、この順歌は、恵慶歌とともに、『続後拾遺集』（五〇一）番（および『秋風集』（一三五八）番）に、「ひのと」の題で収載されるが、前者の作者名は「好忠」になっている。『好忠集』に載っていたため、短絡的に作者を判断してしまったのだろう。

初句「ゆふされば」の用例は、「ゆふさればいとどひがたきわがそでに秋のつゆさへおきそはりつつ」（古今集・恋一・五四五・読入しらず・題しらず）、「ゆふされば蛸よりけにもゆれどもひかり見ねばや人のつれなき」（古今集・恋二・五六二・紀友則・寛平御時きさいの宮の歌合のうた）、「夕されば人なきとこを打ちはらひなげかむためとなれるわがみか」（古今集・恋五・八一五・よみ人しらず・題しらず）、「ゆふさればわが身のみこそかなしけれ



いづれの方に枕さだめむ」(後撰集・恋三・七三九・かねもちの朝臣女・題しらず)、「ゆふされば思ひぞしげまつ人のこむやこじやの定なければ」(後撰集・恋六・一〇六二・よみ人しらず・たのめたりける人に)、「ゆふさればねにゆくをしのひとりしてつまこひすなるこゑのかなしさ」(後撰集・哀傷・一四〇〇・閑院左大臣・あひしりて侍りける女の身まかりにけるをこひ侍りけるあひだに、よふけてをしのなき侍りければ)、「ゆふさればいとどわびしき大井川かがり火なれや消えかへりもゆ」(順集・三六・思)などが列挙される。いずれも、恋人の訪れが期待される夕方に、ひとり寝を託つわびしさが詠まれるが、その点、惠慶の当該歌は、逢瀬をひたすら待ちわびる無邪気さがあり、一線を画する。

「あひ見るへ(き)」という語句は、『新編国歌大観』を検しても、当該歌を含めて述べ七例と少ない。「くればまたあひみるべしとおもへどもきみをくるまはわびしかりけり」(忠盛集・一六七・暁、女をおくるとて、くるまよせて)には、表現上、惠慶の当該歌からの影響が見られよう。

「はるの日」の「ゆふ」を詠んだ歌としては、後に『古今六帖』第一、二四番と第六、四三八八番にも採られた大伴家持の、「春の日に霞たなびきうらがなしこのゆふかげに驚なくも」(万葉集・卷十九・四一九〇・四三二四・廿三日依レ興作歌二首)が挙げられよう。この歌は、「家持独自の歌境を開いた春愁の名吟」(新潮日本古典集成)といわれて名高いが、惠慶の当該歌に、その「春愁」はいささかも感じられない。

「はるの日」が「とくくねぬ」ことを詠んだ歌には、「ひとりのみながむるそらのはるのひはとくくねがたきものにぞありける」(高遠集・二七〇・或人の、長恨歌楽府のなかに、あはれなることをえらびいだして、これがこ

ろばへを、廿首よみておこせたりしに 春日遅遅独坐難天暮)がある。なお、この高遠歌に見られる「春日遅遅」に基づいて生まれた語「遅日」は、元来「唐詩や平安初期の日本漢詩に見いだせる」(同)語であったが、惠慶よりもずっと後に至り、『六百番歌合』などでは、歌題として選ばれるようになる。次の八五(二八一)番歌同様、漢詩文由来の題材で歌作している点、留意されよう。

また、日暮れを待ち望む歌として、「今日はやとくくねなん久かたの天の河霧たちわたるべく」(書陵部蔵御所本(五二〇・一一)躬恒集・六・七月七日)が挙げられよう。

「……こそわびしかりけれ」という句をもつ歌は、『新編国歌大観』を検すると、延べ一四例見出せる。うち『江帥集』二六九番・『拾玉集』三六四番以外は、「人こふる事をおもにとになひもてあふこなきこそわびしかりけれ」(古今集・雑体・一〇五八・よみ人しらず・題しらず)、「暁と何かいひけんわかるれば夜ひもいとこそわびしかりけれ」(後撰集・恋一・五〇八・つらゆき・しのびたりける人にものがたりし侍りけるを、人のさわがしく侍りければ、まかりかへりてつかはしける)、「わかなつむ春のたよりに年ふれば老つむ身こそわびしかりけれ」(貴之集・二八一・延喜の末よりこなた延長七年よりあなた、うちつちの仰にてたてまつれる御屏風の歌廿七首 春)、「おなじなをはなたちばなの花ざかりみじかき夜こそわびしかりけれ」(長能集・一三八・花山院の歌合にめししかば 夏)、「みにそへてもたらぬ秋ををしむとてくれん事こそわびしかりけれ」(陽成院歌合・三九番・左)、「おもふらむこころのうちはしらねどもなくをみるこそわびしかりけれ」(大和物語・第百三十三段・二一〇・公忠)、「おもひいづるまだよにみえぬ道せばみかか

ほどこそわびしかりけれ」(御形宣旨集・九・けふはかへるみち、いとを「ゆく」)、「ひとしれずいまやいまやとまつほどにかへりこぬこそわびしかりけれ」(蜻蛉日記・四・兼家)といった、恵慶と同時代以前の例である。特に、最後に挙げた『蜻蛉日記』の兼家歌は、今や遅しと待つ心情が詠まれており、打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」を伴って「……ぬこそわびしかりけれ」という句をもつ点、恵慶の当該歌と同様である。

八六(二八一)

【本文】

つちのえ

かせさむみころもつつなるつちのえのをれぬはかりのをともするかな

【校異】 かせ 風(前) をれぬ おれぬ(前) をともするかな をともする哉(書古)をとのする哉(前)

【語釈】 つちのえ 土の兄。戊。十干の五番目。ころもつつなる「衣

打つ」は、布に光沢を出したり、布に付けてある糊を柔らかくしたりするために、砧(きぬた)で打つこと。いわゆる「搗衣」で、主に晩秋の歌に詠まれる。「搗衣」は、「本来六朝以来の詩題・詩語」であるという(『歌ことば歌枕大辞典』「搗衣」の項、中川博夫氏)。直前の八五(二八〇)番歌も、漢詩文由来の題材で歌作している点が想起される。「なる」は、音によって事態を推定する意を表す、助動詞「なり」の連体形。つちのえの 衣を打つ道具の取っ手の意の「槌の柄」に、題の「つちのえ(戊)」を隠す。をれぬはかりのをともするかなをれぬはかりのおともするかな。「ぬばかり」は、完了の助動詞「ぬ」の終止形に副助詞「ばかり」が付いたもの。今にも

折れそつなほどの音もするなあ。搗衣は女の仕事であり、孤閨を託つ女のイメージをもつのが一般的であるが、当該歌は、あたりに響き渡る、生活感溢れる槌の音を表現した。「よもすがらとをちのさとにつちわたすきぬたのおとかとどろきのはし」(為忠家初度百首・秋・四二九・遠郷搗衣)。

【通釈】

風が寒いので、衣を打っているらしい槌の柄の、今にも折れそつなほどの大きな音も、聞こえてくるなあ。

【別出】

兼輔集(冷泉家時雨亭文庫資経本) 一四五番

つちのえ

かせさむみころもにつくるつちのえのおれぬはかりのをとのするかな

兼輔集(正保版歌仙家集本) 一三三番

つちのえ

風さむみころもにつくるつちのえのおれぬはかりに音のする哉

【考察】

風の寒さは、冬支度のきつかけとなる。「かせさむみ」衣を打つ歌は、恵慶以前にも、「風さむみわがから衣つつ時ぞ秋のしたばもいるまさりける」(拾遺集・秋・一八七・つらゆき・延喜御時の御屏風に)、「かせさむみなくなるかりのこゑによりつたむころもをまつやからまし」(伊勢集・八九・式部卿宮の前裁あはせに)りむだつ)があり、またほぼ同時代にも、「風さむみなくかり金にあはすればよるの衣はうちまさりけり」(順集・一八〇・大納言源朝臣、大饗のところ)にたつべき四尺屏風調せしむるつた、月夜にころもつつ処)、「かせさむみいもがころもでつつつちのかずしらぬよもすぎぬ

べきかな」(相模集・三六一・はてのあき)といった例が見える。貫之や順の歌が屏風歌であることから、恵慶の時代にはすでに、擣衣の場面が屏風絵の図柄として定着していたことがわかる。また、相模歌が恵慶と同様、百首歌中の一首であり、「つち(槌)」が読み込まれている点には、留意される。

そもそも擣衣の歌は、『古今六帖』第五、三三〇―三三〇五番に、「ころもうつ」の題で載っており、その冒頭は前掲の貫之歌であった。この歌群には、「からころもうつこゑぎけば月きよみまだねぬ人をそらにこそぎけ」(古今六帖・第五・三三〇三)という歌があり、衣を打つ音は、耳にする場所によつては、高く響くものだったらしい。ちなみにこの歌は、『貫之集』二五番に、「(延喜十三年十月内侍屏風のうた、うちのおほせにてたてまつる)月夜に衣うつ所」という詞書で載っており(結句「空にしるかな」、『和漢朗詠集』「擣衣」にも採られている)巻上、秋、三五一番、結句「そらにしるかな」。恵慶の当該歌においても、擣衣の様子を聴覚的に捉えて、「ころもうつなる」と表現しているが、同じ句は、「草枕夕風さむく成りぬるを衣うつなるやどやからまし」(貫之集・四五二・旅人のきぬうつこゑをききたる)「里人の衣うつなるつちのおとにあやなくわれもねざめぬるかな」(和泉式部集・四六・秋)にも見える。なお、後者は和泉式部の百首歌であり、恵慶の当該歌や先の相模歌と共通して、「つち(槌)」が詠まれている。

このように、百首歌中に「つち(槌)」の語を見出す傾向があるように思われるが、はたして、「つちのえ」の例も、『新編国歌大観』を検すると、「やまだのひつちのえしもほにいでねばにころもひつちにひしとぞおもふ」(好忠集 好忠百首・四五五・つちのえ)、「こもりぬのこをしなくなるはおもひえつちのえあはねばあるにぞあるらし」(好忠集 順百首・五六九・つちの

え)という百首歌の例が指摘されるのみである。子どもの泣き声を詠んだ順歌には、生活感に根ざした大きな音を題材としている点で、恵慶の当該歌に共通するものがある。

「をれぬばかり」という語句の和歌における用例は少ない。恵慶以前には、「うつろはむ事だに惜しき秋萩ををれぬばかりもおける露かな」(拾遺集・秋・一八三・伊勢・亭子院御屏風に)を挙げるにとどまるようである。だが、この伊勢の歌は、『新撰和歌』のほか、『古今六帖』や『和漢朗詠集』にも収載され、恵慶の時代には比較的知られている歌であった可能性が高い。なお、先の伊勢の歌と第三句以下が全く一致する歌に、「さをしかのあさぶすをの秋はぎををれぬばかりもおける露かな」(古今六帖・第二・九四七・しか)がある。

結句「を(お)ともするかな」は、『新編国歌大観』を検しても、用例が見当たらない。前田家本の異文「を(お)とのするかな」ならば、同じ恵慶の、「松かぜもきしうつなみももるともにむかしにあらぬおとのするかな」(後拾遺集・雑三・一〇〇〇・恵慶法師・にしのみやのおほいまうちぎみつくしにまかりてのちすみはべりけるにしのみやのいへをみありきてよみ侍ける)が見出せる。この歌は、『恵慶集』九一番に、「そのおとど、つくしにくだりたまてのち、西宮をいりてみれば、いとあはれなり」という詞書で載っている。第四句「昔にもあらぬ」となっているが、「おともするかな」と助詞「も」をとっている諸本はない。

八七 (二八二)

【本文】

つちのと

かとたわせきのふかりそむとおもひしをひつちのとくもおひにけるかな

【校異】 きのふ 昨日(前) おもひしを 思しを(前) おひにける かな おひにける哉(書古) おひにける哉(前)

【語釈】 つちのと 土の弟。己。十干の六番目。 かとた(かどた) 屋

敷地の周り、特に、門の前にある田。堀の内。耕作に最適なところから重視され、荘園制下では、在地領主の有力な得分地。 わせ 稲の一種。最も

早く熟すもの。 かりそむ 刈り始める。「そ(初)む」は、……し始めるの意。 ひつち 稲の刈り株から再び伸びた新芽。 藪(ひこばえ)。

とくも (時期や時間などが)早くも。

【通釈】

門の前にある田の早稲を昨日刈り始めたと思ったのに、その刈り株から早くも新芽が伸びてきたことだなあ。

【別出】

『兼輔集』(冷泉家時雨亭文庫資経本) 一四六番

つちのと

かとかりのせにのふかりそおもひしをひつちのとくもおひにけるかな

『兼輔集』(正保版歌仙家集本) 一三四番

つちのと

かとかかりせきのふかりそ思ひしをひつちのとくもおひにける哉

【考察】

季節の移り変わりの早さを、稲の生長に見た歌である。

初句「かどたわせ(門田早稲)は、『万葉集』に「橘をもりへのさとのか

どたわせかる時過ぎぬ来じとすらしも」(万葉集・巻十・二二五・二二五

五・寄水田)と用いられているが、これ以降用例はない。「かどたのわせ」の形で用例があらわれるのが、好忠の「わがやどのかどたのわせのひつちほを

見るにつけてぞおやは恋しき」(好忠集・二一・七月中)であるのは注目すべきで、「ひつち(ほ)」が同時に詠まれていた点も、惠慶の当該歌と共通

する。なお、「かどたのいね」の例が、安法の「わがやどの門田のいねもかりかけてかへらんこまのためとまつらん(安法法師集・一〇九・屏風の絵に、

旅人の田かるをみて)」という歌に見える。門田の風景は、惠慶の時代、屏風絵の図柄として、ある程度定着していたものと推察される。

第二句「かりそむ」には、「秋の田のかりそめぶしもしてけるかいたづら

いねをなにつままし」(後撰集・恋四・八四五・藤原成国・人のもとにまかりて待るに、よびいれねはすのこにふしかけて、つかはしける)や、「お

のづからゆきあひのわせをかりそめに見しひとゆゑやいねがてにせむ」(新勅撰集・恋一・六六二・清輔朝臣・久安百首歌たてまつりけるこひの歌)の

ように、「刈り初め」に「仮初め」、「いね(稲)」に「ね(寝)」を掛けた例が見られる。いずれも恋に悩む気持ちを田園風景にちなんだ歌語を用いて詠んだ例であるが、当該歌において、「刈り初め」と「仮初め」との掛詞を認め、恋歌と解釈するのは無理がある。

第四句「ひつち」は、「かれる田におふるひつちのほにいでぬは世を今さら

らに秋はてぬとか」(古今集・秋下・三 八・よみ人しらず)をはじめ、好忠にも、「をやまだのひつちのえしもほにいでねはこころひとつにこひして

ぞおもふ」(好忠集 好忠百首・四五五・つちのえ)と見えるように、「ほ(穂)」とともに詠まれることが多い。惠慶と同時代には、「ひつちほ」とい

う語もあり、前掲『好忠集』二〇一番歌のほか、「心もておふる山田のひつちほは君まもらねどかる人もなし」(後撰集・秋上・二六九・よみ人しらず・返し)、「あきはてて人もてふれぬひつちほのわが心もておひいづるなり」(古今六帖・第二・一一二二・ふゆ)がある。その点で、「穂」を詠まない当該歌は、独自性がある。

第三句に「おもひしを」、結句に「く」にけるかな」を置く用例は、「さきはてて今はあらじと思ひしをはかくれてもにはほひけるかな」(古今六帖・第六・三七七八・よみ人しらず・しをに)や、「なげきにははるしらせじとおもひしをひとのつらきにもえにけるかな」(能宣集・三五八)があげられる。また、「とくも」にけるかな」の形は、「山ならぬすみかあまたにきく人の野ぶしにとくも成りにけるかな」(拾遺集・雑下・五二八・健守法師伝名ののぶしにてまかりいでて侍りけるとし、いひつかはしける)があり、また順にも、「昨日までふゆこもれりしがまふのにわらびのとくもおひにけるかな」(好忠集 順百首・五六八・ひと)が見出せる。特に後者は、惠慶の当該歌と、「昨日」「とくもおひにけるかな」の語句が一致し、植物の生長の早さに季節の推移を実感するという歌の内容も共通することから、作歌における影響関係が深い。

その一方で、「つちのと」題の 好忠百首 順百首 歌は、「人のみよにはまつちのときはやまみねのくずはのつらみてぞふる」(好忠集 好忠百首・四五六・つちのと)、「かぜふけばゆるぎのもりひとつまつまつちのとりのとくばなりけり」(好忠集 順百首・五七・四五六・つちのと)といったように、「つちのと」を隠すのに、いずれも「まつち」という語を用いており、惠慶百首 の当該歌のみ一線を画す。

なお、「おもひしを」「とくも」「く」かな」という歌の構造をもつ先行歌として、「花薄ほには出でじと思ひしをとくも吹きぬる秋の風かな」(貫之集・六六三)を挙げることができる。当該歌の発想に影響を与えたものか。

八八 (二八三)

【本文】

か  
の  
え

さくらはないつれのいろもにくからすかのえたおりていへつとにせん

【校異】 さくらはな さくら花(前) いつれのいろも いつれもいろは

(前)

おりて をもて(前) いへつとにせん いへつとにせむ(前)

【語釈】 かのえ 金の兄、庚。十干の七番目。にくからす(にくから

ず) 見苦しくない、好感がもてる様子だ、感じがよい。 いへつと(い

へつと) 自分の家への土産。

【通釈】

桜の花はどの色も感じがよい。あの枝を折って我が家への土産にしよう。

【別出】

『兼輔集』(冷泉家時雨亭文庫資経本) 一四七番

か  
の  
え

むめの花いつれはにくからすかたえたをもちていへつとにせむ

『兼輔集』(正保版歌仙家集本) 一三五番

か  
の  
え

梅はないつれ にくからすかのえたおりて家つとにせん

【考察】

花見に出掛け、その美しさを愛でるあまり、枝を家に持ち帰りたいと詠んだ歌である。「見てのみや人にかたらむさくら花てこゝにをりていへづとにせむ」(古今集・春上・五五・ সেই法し・山のさくらを見てよめる)の下旬がほぼ一致しており、この歌に想を得たものである。

古本系本文「いづれのいろも」に対し、流布本の前田家旧蔵本は「いづれもいろは」になつてゐる。「いづれも」は「の例は、和歌において他に見い出せない。」「いづれのいろ」の用例には、「ここのへにうつるふからにきくのはないづれの色をこころそむらん」(清正集・四七・うち、十月十四日)、つば前栽のきくのえに( )がある。ここでは、「いろ」を係助詞「は」によつてとりたてねばならない理由も見出しがたいため、古本系本文のまま解釈しておく。

第三句「にくからず」「は」「よそにてもにくからずだにあらばこそしほるしほるもぬれぎぬをきめ」(古今六帖・第五・三三三・ぬれぎぬ)にある他は、中世まであらわれない。体言を下接して、「にくからぬ人のきせけんぬれ衣は思ひにあへず今かわきなん」(後撰集・恋五・九五六・中将内侍)のように用いられることが多い。「にくし」は普通、対人関係についていう語であることから、それを自然の景物に対して用いた例は珍しく、「さくら」と「にくし」を詠み込んだ歌も、当該歌の他には、恵慶と同時代の例として、山もよにさけるさくらのにくからぬいもにあひみてこふる比かも(古今六帖・第六・四二二〇・山さくら)を指摘することである。

第四句「かのえだ(彼の枝)」「は、和歌において他例を見ない。」「かのえ」題の歌には、順の「はなのかのえだにしとまるものならばくるるはるををも

しまざらまし」(好忠集 順百首・五七一・かのえ)のようた、「( )の(香の枝」と詠んだ例があり、また好忠は、「いくよしもあらじとおもふよのなかのえしもこころにかなはぬぞうき」(好忠集 好忠百首・四五七・かのえ)というように、「( )世のな( )かの」に副詞「え」を組み合わせて詠んでいる。すると恵慶が、百首歌という場で、「かのえ」題をきっかけにして、歌語としては珍しい「彼の枝」という語句を、独自に導入した可能性は高い。結句の「いへづ」という語は、先に挙げた『古今集』五五番歌のほか、同じく素性の「むめの花をればこぼれぬわが袖にほひかうつせ家つとにせん」(後撰集・春上・二八・素性法師)や、「家つとにあまたの花をもるべきにねたくもたかをすゑてけるかな」(拾遺集・雑秋・一一・一・平兼盛・円融院の御屏風に、秋ののにいろいろの花さきみだれたる所にたかすゑたる)などに見える。八代集においては、以上の三首を数えるのみである。

八九(二八四)

【本文】

かのと

さをしかのともまとはせるこゑするはつまやこひしきあきのやまへに

【校異】 こひしき 恋しき(前) あき 秋(前) やまへ 山へ(前)

【語釈】 かのと 金の弟、辛。十千の八番目。初句・第二句に隠す。

さをしか 小牡鹿。「さ」は接頭語。雄の鹿。 とまとはせる( )ともま

どはせる( )まどはす「は、見失つ意。」「る」は完了の助動詞「り」の連

体形。「友まどはせる」で、仲間にはぐれた、仲間を見失つたの意。 つ

まやこひしき 牡鹿が妻の牝鹿を恋慕つのかの意。 あきのやまへに

(あぎのやまべに)「山辺」は、山のほとり。季節は鹿の鳴く秋に設定されている。

## 【通釈】

辛

牡鹿の、仲間にはぐれた鳴き声をするのは、妻が恋しいのか、秋の山辺で。

## 【別出】

『拾遺和歌集』・卷七・物名・四二八

かのとといふことを

恵慶法師

さをしかの友まどはせる声すなりつまやこひしき秋の山べに

『拾遺和歌抄』・卷九・雑上・四九一

かのとといふ所をよみ侍りける

恵京法師

さをしかのともまどはせる声するはつまや恋しきあぎの山辺に

『兼輔集』(冷泉家時雨亭文庫資経本) 一四八番

かのと

さをしかのともまどはせるこゑすなりつまやこひしき秋の山へに

『兼輔集』(正保版歌仙家集本) 一三六番

かのと

さをしかのともまよはせるこゑすなり妻や恋しき秋の山へに

## 【考察】

牡鹿が群れから離れ、単独で悲痛に鳴いている理由を、秋になって牡鹿が恋しくなったからだろうか、推測した歌である。

第二句「ともまどはせる」の例は、「声たててなきぞしめべき秋ぎりに友まどはせるしにはあらねど」(後撰集・秋下・三七二・友則)の他、「ゆふ

さればさほのかはらの河ぎりに友まどはせる千鳥なくなり」(拾遺集・冬・二三八・友則)のように、鹿以外の動物に用いられたものもある。これらの歌は、仲間を見失った物理的原因を、「秋霧」や「河霧」と明確に説明する。これに対し、当該歌は、上句では「ともまどはせる」こゑするは「と、鹿の声を主題として提示するにとどめ、その原因を下の句で推測する。いわば、上の句は問い、下の句はその答えという構造なのである。

ただし、第三句「こゑするは」は、『拾遺集』では「声すなり」とある(別出「兼輔集諸本」「こゑすなり」)。「こゑすなり」は、「あぎののに人松虫のこゑすなり我かとゆきていざとぶらはむ」(古今集・秋上・二〇二・よみ人しらす・題しらす)、「帰る雁雲ちにまどふ声すなり霞ふきとけこのめはる風」(後撰集・春中・六〇・よみ人しらす・かへるかりをききて)といった例があり、鎌倉期に入る頃から用例数が急増する。一方、「こゑするは」は、恵慶と同時代以前の例としては、「このねも竹もちとせのこゑするは人の思ひにかよふなりけり」(後撰集・慶賀・一三七・貫之)があるのみだが、恵慶は、主題を提示する「こゑするは」という表現を、他にも、「すだきけんむかしの人もなきやどにただかけするは秋の夜の月」(後拾遺集・秋上・二五三・恵慶)というように用いている。以上の点から推すと、やはり、「こゑするは」のほつが、本来的な本文で、後により一般的な「こゑすなり」に変えられたかと思われる。

秋、牡鹿が牡鹿を恋い慕って鳴くことを詠んだ和歌は、はやく『万葉集』に見える。「秋さらば今も見るごと妻恋ひに鹿(か)鳴かむ山ぞたかのほらうへ」(万葉集・巻一・八四・八四)、「妻恋ひに鹿(か)鳴く山辺の秋萩は露霜寒みさかりすぎゆく」(万葉集・巻八・一六・一六)四、「やまび

このあひとよむまで妻恋ひに鹿(か)鳴く山辺にひとりのみして(万葉集・巻八・一六 二・一六 六)、「秋萩のちりゆくみればおほほしき妻恋ひすらしさ牡鹿鳴くも」(万葉集・巻十・二二五 二二五四)など作例は多い。恵慶歌はこうした類型的表現を踏襲したものに過ぎないとも言えるが、むしろここでは『万葉集』の表現世界と重ね合わされている点に注意しておくべきであろう。

なお、「かのと」を隠題にした歌は、他に「人づまとわがのとふたつおもふにはなれこしそではあはれまされり」(好忠集 好忠百首・四五八)、「こころうしふかき山にもいりにしかのどかにてりてつきよす」(好忠集 順百首・五七二)が見出される。この場合、題の詠み込み方は、三者三様である。

九〇(二八五)

【本文】

みつのえ

よと河のすまであなたにあるみつのえこそまたみねこまのたちとも

【校異】 よと河 よとかは(前) すまで すきて(前) みつ 水(前)

【語釈】 みつのえ(みづのえ) 水の兄、王。十千の九番目。第三・四句に隠す。 よと河(よど河) 桂川・宇治川・木津川の三つの川が合流する

辺りの川の名。水流が複雑になり、水が淀んでいるように見えるところから、現在の京都市伏見区淀町あたりを昔は「淀」と呼んでいた。「よど川のそこすまねどこひといへばすべていをこそねられざりけれ」(古今六帖・第三・二ひ・一五二五)。「すまで(すまで)」「で」は打ち消しの接続助詞。川

の水が澄むことなく、の意。 あなた 指示代名詞。遠称。あちら、向

う。 みつの(みづの) 「水の」に地名「美豆野」を掛けるか。「美豆野」は、すでに『三代実録』にその名が見える。「よどのなるみづのみまきにはなちかふこまいばへたりはるめきぬらし」(恵慶集 恵慶百首・二〇二)という歌を参考にすると、当該歌も、淀川近辺にあった「美豆の御牧」の駒を想定して詠んだと推察される。 えこそまだみね(えこそまだみね)「え」は可能の意を表す副詞。まだ見ることができない、の意。河の水が濁っているため、馬の姿をまだ見ることができない、というのである。 こま 駒。馬を指している歌語。 たちと(たちど) 立っている所。

【通釈】

淀川の水が澄むことなく淀んでいる、その向こう側にある美豆野では、まだ見ることができない。馬が立っているところも。

【別出】

『兼輔集』(冷泉家時雨亭文庫資経本) 一四九番

みつのえ

よとかはやすきてあなたにあるみつのえこそまたみねこまのたちとも

『兼輔集』(正保版歌仙家集本) 一三七番

みつのえ

よとかはやすきてあなたにあるみつのえこそまたみねこまのたちとも

【考察】

「みつのえ」を隠題にした歌には、「ゆくみづのえにだにあらはぶじがはのながれてひとにすまざらめやは」(好忠集 好忠百首・四五九)と「はるたばまつまろつゝおじゆみづのえすはとはあしてややみなん」(好忠集 順



百首・五七三(がある。「みづのえ」を「みづ(水)の」に隠し、また、「ふじ・よど(河)や」すむ」という語を用いるなど、恵慶歌は好忠の作例を踏まえて詠まれていると想定される。当該歌の「すまで」には、「すぎて(過ぎて)」の異文もあるが、これでは、「駒の立ち処」が見えない理由がはつきりしない。ここは、好忠百首 歌の本文などを参看して、「すまで」が本来のものであったと推測しておく。

「河」の「みづ(水)」と「こま(駒)」を読み込んだ歌は、「ささのくまひのくま河にこまとめてしばし水かへかけをだに見む」(古今集・神遊歌・一八・ひるめのうた)、「ちかはれしかのの河原に駒とめてしばし水かへ影をだに見む」(後撰集・雜二・一一九・あつただの朝臣の母・河原にいてはらへし侍りけるに、おほいまつちぎみもいであひて侍りければ)などがある。

「たちど」の用例としては、「さ月山このしたやみにともす火はしかのたちどしるべなりけり」(拾遺集・夏・一二七・つらゆき・延喜御時月次御屏風に)、「あやしくもしかのたちど見えぬかなをぐらの山に我やきぬらん」(拾遺集・夏・一二八・平兼盛・九条右大臣家の賀の屏風に)などがあり、また、恵慶自身も「みやまべのしかのたちどをたづぬれば見せたるものはなつをちのつ」(恵慶集 恵慶百首・二五五)と詠んでいるように、「鹿の立ち処」の用例が一般的である。その点、「こまのたちど」はやや特異な表現であったかと思われる。時代が降っても、「夏たちこまのたちどの水をあさみよどのまこもはつづのくみにけり」(定頼集・二六二)のような作例が見出せる程度である。

九一(二八六)

【本文】

みづのと

ちはやふる神のやしるのはふりこもみづのとあけていてにけるかな

【校異】 かな 哉(書古)(前)

【語釈】 みづのと(みづのと) 水の弟、癸。十干の十番目。第四句に隠す。

ちはやふる(ちはやぶる) 「神」または広く神に関する語にかかると神のやしる 神社。ここでは、後述の「みづ」との関わりで住吉社を想定しておく。住吉社は摂津国一の宮。航海の神、のち歌の神としても崇

敬された。恵慶も実際に住吉に参詣したとみられ、「われとはば神よのこともかたらなんむかしをしれるすみよしの松」(恵慶集・一一一・すみよしにまつでて、すみよしの松といふことをはてに人々よむに)という詠を残している。 はふりこ 神主・禰宜に次ぐ下級の神職。「はふり(祝)」「はふりべ(祝部)」に同じであるが、特に女性の神職や巫女を意味する場合があるという。『歌ことば歌枕大辞典』田仲洋己氏。 みづのと 「みづ」を

「御津」と見て、「御津の門」すなわち御津の海門である御津崎と想定した。

御津は、難波の港津で、難波の御津、墨江の御津、大伴の御津などとも呼ばれた。『万葉集』には、「……難波に下り 住の江の 御津に船乗り……」(万葉集・巻十九・四二四五・四二六九)という、入唐使に贈った歌がある。なお、御津崎は、『万葉集』二四九(二五〇)番、一四五三(一四五七)番に、その名が見える。

【通釈】

航海の神・住吉神社にお仕える祝子も、御津の門を開け、船出してしまっ

たのだな。

【別出】

『兼輔集』(冷泉家時雨亭文庫資経本) 一三三番  
 ちはやぶる神のやしるのいふかりは水のとあひていのるめるかな

【考察】

「住の江にいつく祝(はぶり)が神ことと行くとも来とも船は早けむ」(万葉集・巻十九・四二四三・四二六七)に見られるように、住吉神社の「はぶりこ」は、航海の安全を祈願する参拝者に対して、御託宣を伝えることがあつたよつである。とすれば、当該歌の下旬は、その「はぶりこ」自身が、何らかの事情で船出してしまった状況を詠んだものか。

第二句の「かみのやしる」は、『万葉集』に五例あり、すべて、枕詞「ちはやぶる」を伴つ。「ちはやぶる神の社にわがかけし幣はたばらむ妹にあはなくに」(万葉集・巻四・五五八・五六一)は、祈つたのに恋人に逢えないから幣を返せというもの。「夜並べて君を来ませとちはやぶる神の社をのまぬ日はなし」(万葉集・巻十一・二六六〇・二六六八)、「吾妹子にまたも逢はむとちはやぶる神の社をのまぬ日はなし」(万葉集・巻十一・二六六一・二六七〇)は、下旬を同じくし、いずれも恋人に会うことを祈念した歌である。また、『拾遺抄』には、人丸の歌として、「ちはやぶる神のやしるもこえぬべしいまは我がみのをしげなければ」(拾遺抄・恋上・二四六)が見える(ただし、『拾遺集』九二四番・『人丸集』一九五番では「神のいがき」になっている)。その他、恵慶とほほ同時代の私家集に、用例が三首見出せる。「ちはやぶるかみのやしるにいのりくるみちのほごさへおもなれにけり」(元真集・二六・おなしつすの御障子絵に、をんな宮のつけさせたまつける女、いなり

にまづでたるところ)、「千はやぶる神のやしるを尋ねつつけふのためてふ祈りをぞする」(兼盛集・二二二・大将の家にむすめのもきたるに)、「さだめなくひと日めべりにめぐるてふかみのやしるやいつこなるらん」(好忠集好忠百首・四六一・一日めべり)のうち、「元真と兼盛の歌は、「ちはやぶる」を伴つ。好忠歌は、百首歌中のものである点、留意しておきたい。以上の用例以外は、新古今時代まで詠歌年代が下る。

第三句の「はぶりこ」の例は、恵慶と同時代以前には見出しにくい。管見では、「はぶりこがいはふやしるのもみぢばもしめをばこえてちるてふものを」(古今六帖・第五・二六〇六・雑思)が初出のようである。

最後に、「みつのと」を物名として詠んだ例として、「あふみなるみつのとまりをうちすぎてふなでていなんことをしぞおもふ」(好忠集 好忠百首・四六〇・みつのと)、「ひとめみつのだかにいまはあるべきをあふじかへたるいのちとやいはん」(好忠集 順百首・五七四・みつのと)を挙げておこう。好忠は「御津の泊」に、順は「見つ」のどかに「にまたがって折り込んでいる。恵慶の当該歌の内容は、好忠歌に類似するところが大きい、技巧としては、順の方に工夫の跡が窺えよつ。

附記

本註は、筑紫平安文学学会で行っている『恵慶法師集』輪読の成果の一部である。既発表分については、以下を参照されたい。

「恵慶百首 春部試注」(『純真紀要』第44号、二〇〇四年三月)

「恵慶百首 夏部試注」(『純真紀要』第45号、二〇〇四年十二月)

- 「恵慶百首 秋部試注」、『活水論文集』第48集、現代日本文化学科編、二〇〇五年三月）
- 「恵慶百首 冬部試注」、『活水日文』第47号、二〇〇五年十二月）
- 「恵慶百首 恋部試注」、『純真紀要』第46号、二〇〇五年十二月）
- 「恵慶百首 浅香山春夏部試注」、『文藝と思想』福岡女子大学 第70集、二〇〇六年二月）
- 「恵慶百首 浅香山秋冬部試注」、『文化情報学』同志社大学文化情報学部 創刊号、二〇〇六年三月）
- 「恵慶百首 浅香山恋部試注」、『活水論文集』第49集、現代日本文化学科編、二〇〇六年三月）
- 「恵慶百首 序文試注」、『同志社国文学』第65号、二〇〇六年十二月）

また、用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2とともに、竹田正幸作成の文字列解析器「e-CSA」 Ver.1.04を使用した。

なお、校正の段階で、川村晃生氏・松本真奈美氏、『恵慶集注釈』（貴重本刊行会、二〇〇六年十一月）に接した。御参看いただきたい。